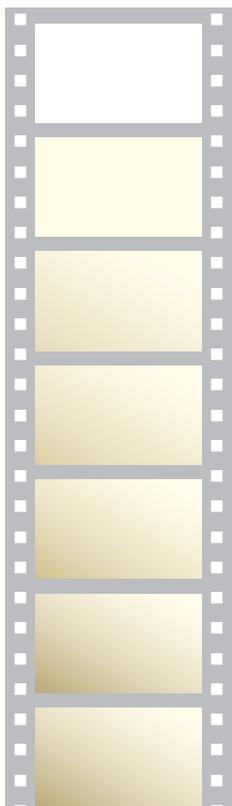


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第十回 「まごころのフィルム」

ぼくが入った大学は、仙台市にある東北学院大学。法学部法律学科です。「将来、どんな職業に就職するか」など全く考えていませんでした。「とりあえず大学に入って法律でも勉強しておこう」という軽い気持ちでした。また、「好きな映画をたくさん観ることができる」という開放感もありました。

学校の正門前では、各クラブの先輩たちが立看板やプラカードを持って、入部の勧誘をしていました。ぼくは、「映画部」と書いてある先輩の所へ行き、部の活動などについて聞きました。話によると、映画を観て合評するだけでなく、実際に16ミリカメラ（ベルハウエル）で撮影し「学院ニュース」や、予算があれば「自主制作映画」も作っているとのこと、ぼくが考えていた映画部よりもクリエイティブ（創造的）な活動をしていると思いました。また、説明してくれる先輩も親しげで、姉

と二人姉弟キョウテイのぼくにとって兄のように感じ、クラブ活動は「映画部」と決めたのです。

部室はキャンパス内にある運動場に並行して一直線に並んだプレハブ長屋で、10団体ほどのクラブが入居していました。三畳間くらいの狭いスペースに、長いテーブルを挟んで背もたれのないベンチがあり、奥のロッカーには撮影機材が置いてありました。寒い日には、暖をとる設備がないため、火鉢に炭を起こして暖まりました。仙台は青森に比べ雪は少ないですから・・・。

団塊の世代の新生がたくさん入部したことから映画部の部員も増えたので、「みんな力で力を合わせ、自主制作映画を作ろう」という話が部会で出て来たのは、翌年の春のことでした。

先輩三人が脚本を書き、「乖離カイリ」（そむき離れるという意味）という題名で、内容は青春物でした。制作するにあたり、部員一人ずつの担当が決められ、ぼくは「渉

外」の担当になりました。

早速、監督から「恋人同士が喫茶店でお茶を飲み、幸せそうにしているシーンを撮影したいので、喫茶店を捜して撮影の許可をとってほしい」という要望が出ました。

部員がいつもたまり場になっていた「キャピタル」という店がありました。店内は狭いし、場所は地下で暗く、撮影にはむいていませんでした。

何十軒、喫茶店を回ったでしょうか？。監督の気に入りそうな（撮影の条件に合った）店は見つかりません。しかし、夕方で暗くなったところにひとときわ目立つ全面ガラス張りの店を発見したのです。それは仙台駅近くの「レモン」というスペースも広い喫茶店でした。

支配人に撮影の内容を説明し、お願いしたところ、こちらの気持ち伝わったのか、撮影の許可を下さり、映画部に同情してか、映画上映の時に作成するパンフレッ

トの広告まで約束してくれました。

部員たちがそれぞれの立場で頑張つて映画は完成しました。しかし、ぼくが卒業した翌年（昭和46年）プレハブ長屋は火災に遭い、フィルムや資料は燃えてしまいました。いまに残るのは、制作にかかわった人たちの心のフィルムに残る映像だけです。

（続）

（文中敬称略）

伸

平成22年12月